第４１回全国中学生人権作文コンテスト福島県大会
最優秀賞（福島県人権擁護委員連合会長賞）

初恋

匿　名

小学六年生の夏、私は大親友の女の子を好きになった。

最初はとまどった。自分は女なのに、男の子ではなく女の子を好きになるなんておかしいからだ。しかし、その子に会うたびに気持ちは増していき、ああこの気持ちは恋なんだな、と思うようになった。

数か月たった頃、自分だけではこの感情を抱かえきれなくなり、別の友達に相談することにした。私が恋をしている人がいると言うと、友達は親身に話を聞いてくれた。友達に絶対秘密にするから好きな人教えて、と言われたので、私は親友兼好きな人の名前を言った。すると、

「女の子なのに女の子好きになるとかおかしいよ。考え直したら？」

と言われた。正直ショックだった。あんなに親身になって話を聞いてくれていたのに、おかしいと言われ、絶望の底につき落とされたようだった。

それから私は、好きという気持ちをなんとか忘れようとした。メンタルはもうボロボロだった。だけどそれは仕方ないことだ。女の子を好きになるなんておかしいから、正常に戻るためには必要な痛みなんだと思っていた。

また数か月たち、卒業式の練習が始まった頃。日本では新型コロナウイルスが流行し始め、学校が休校になった。正直まだ恋を諦めきれていなかったため、忘れるにはちょうど良い期間だと心の奥で思った。結果的に忘れることはできなかったのだが。

休校期間中暇をもてあましていた私は適当にテレビをつけていた。そのとき偶然、LGBT について放送していた。LGBT とは、性的マイノリティのうち、代表的な「レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー」の４つの頭文字をとったものだ。わたしは LGBT のうち、レズビアンに入ることを知った。また、その番組では LGBT の人に取材した内容も放送していた。記憶があいまいで、全てを思い出すことはできないが、とても心に刺さった言葉がある。

「愛の形って本当に人それぞれで、何が正解とかないんですよ。」

当時の自分は、自分はおかしい、間違っていると思いこんでいたから、この言葉は深く刺さった。忘れなくていいんだと思わせてくれたのだ。それから、自分の気持ちは明るくポジティブになっていった。

休校期間が終わり、卒業式の日。礼や歌も失敗せずにできてうれしかったことを覚えている。そして式が終わった後、ついに私は親友に想いを伝えた。親友はとても戸惑っていて、悪いことしちゃったなと思った。

告白の結果は、これからも親友、だった。恋人になることは叶わなかったけれど、とても満ち足りた気持ちになったことを覚えている。この子を好きになってよかったと、心から思える瞬間だった。

今私がこうやって書いていることは、本当は親しく信頼している人にしか話してはいけないことだ。これをカミングアウトという。なぜ私が誰が読むかも分からない作文上でカミングアウトしたかというと、もっと多くの人に LGBT について考えてほしいからだ。人の価値観というのは様々な種類があって、まったく同じ思想の人なんていない。そういうことを理解できる人が増えれば、小学六年生だった頃のように傷付く人が減るかもしれない。

また、今この作文を読んでいるあなたの周りにも、自分の性について悩んでいる人がいるかもしれない。そんなときはやさしく接して、悩みを聞いてあげてほしい。人がかかえることのできる量には限りがあるのだから、気づくことのできる範囲の人は気づいて、一緒に背負ってあげてほしい。悩んでいる人からすれば、悩みをうちあけられる人の存在はとても大きなものだ。逆に否定されるようなことは、もっと自分を追いこんでしまう。

私はこの経験から、個人を尊重する大切さを学んだ。「みんなちがってみんないい」や「十人十色」といった言葉があるが、本当にその通りだと思う。今私は小学校最後の日に告白した親友とも仲良くやれている。他の友達も LGBT について理解が深まっていて、前みたいにおかしいと言われることも減った。しかし、まだまだ日本には LGBT について多くの課題がある。国全体を変えることは難しいけれど、自分の周りならいくらでも変えることができる。私は変えることもできたし、変わることもできた。これからも個人の尊重を大事にするとともに、私みたいに変わることのできる人が一人でも増えるといいなと思った。